新潟県立万代島美術館ニュース

B.island

Vol.19
2020

2020年度 展覧会ピックアップ

ルート・ブリュック　蝶の軌跡

2020年10月10日(土) ▶ 12月6日(日)

《ライオンに化けたロバ》1957年　タピオ・ヴィルカラ　ルート・ブリュック財団

北欧・フィンランドを代表するセラミック・アーティスト、ルート・ブリュック(Rut Bryk 1916-1999)。1942年から約50年にわたり、フィンランドの名窯・アラビア製陶所の美術部門に在籍し、愛らしい図柄の陶板から膨大なピースを組み合わせた迫力あるモザイク壁画まで、多様な作品を世に送り出しました。

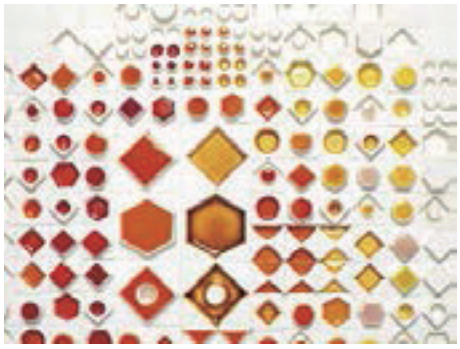
ミラノ・トリエンナーレでの受賞(1951、1954)や、ブリュッセル万国博覧会への出品(1958)などを通じ、フィンランドのアートやデザインが国際的に評価される気運を作った一人でもあります。重厚でエレガントな釉薬の輝きや、独自の自然観に基づく繊細な図や形態を特徴とする彼女の作品は、今も多くの人びとを魅了しています。夫であり、時に共同制作を行ったデザイナーのタピオ・ヴィルカラ(Tapio Wirkkala 1915-1985)もまた、妻の才能を尊び、その作品を蒐集し続けました。

Photo: Tapio Wirkkala Private Collection

本展は、2016年にブリュックの生誕100年を記念して母国で開催された大規模な回顧展をベースに、新たな要素を加え、日本で初めてブリュックの全体像を紹介する展覧会です。日本での巡回は昨年東京でスタートし、大きな反響をよびました。初期から晩年に至るセラミック作品を中心に、テキスタイルやスケッチを含めた約200点の作品により、アート、デザイン、建築をおおらかに乗り越えたその創作活動を振り返ります。

また、ブリュックの長女であり、新潟県妻有地区で開催される「大地の芸術祭」にも参加した現代アーティスト、マーリア・ヴィルカラがブリュックをテーマに構成したインスタレーション作品を展示するほか、新潟会場独自の展示として、日本を代表するグラフィック・デザイナー・亀倉雄策(新潟県燕市出身)がかつてコレクションしたブリュック作品や北欧の工芸品もあわせてご覧いただきます。

今井有(当館業務課課長代理・学芸員)



《スイスタモ》(部分) 1969年
タピオ・ヴィルカラ　ルート・ブリュック財団

《ヴェネチアの宮殿：リアルト橋》1953年
タピオ・ヴィルカラ　ルート・ブリュック財団

《蝶たち》1957年
タピオ・ヴィルカラ　ルート・ブリュック財団

Tapio Wirkkala Rut Bryk Foundation's Collection / EMMA - Espoo Museum of Modern Art　© KUVASTO, Helsinki & JASPAR, Tokyo, 2018 C2531

2020年度の展覧会

※展覧会名は仮称です。会期等は変更されることがあります。

THE ドラえもん展 NIIGATA 2020

2020年3月20日(金・祝) ▶ 5月17日(日)

「あなたのドラえもんをつくってください」。国内外で活躍する28組のアーティストたちに、こんなお願いをしました。1970年の誕生以来、日本中に夢を届けてきたドラえもん。みなさんの心の中にも、思い出のドラえもんや、いつでもそばで優しく助けてくれるドラえもんの姿が、刻まれているのではないでしょうか。変わりゆくこの時代の中で、アーティストたちに「あなたのドラえもん」を表現してもらったら、どんな世界が生まれるだろう。何を願い、未来へ何を伝えてくれるだろう。この展覧会のために、様々な発想や技法によって生み出された作品をお届けします。

村上隆「あんなことといいな　出来たらいいな」(部分)
© 2017 Takashi Murakami/Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved. © Fujiko-Pro

デザインあ展

2020年7月11日(土) ▶ 9月22日(火・祝)

こどもたちのデザインマインドを育む、NHK Eテレのテレビ番組「デザインあ」。本展は「デザインあ」のコンセプトを、体験の場に発展させた展覧会です。優れたデザインには、人と人、人とモノをよりよくつなぐ工夫があります。番組では、身のまわりに意識を向け(見る)、どのような問題があるかを探り出し(考える)、よりよい状況をうみだす(つくる)という一連の思考力と感性を「デザインマインド」ととらえ、多彩な映像表現をもちいて伝えてきました。身のまわりにあるモノ・コトから概念までテーマを掘り下げ、未来を担うこどもたちに、「見る」「考える」「つくる」ことの豊かさを体感してもらいたいと願っています。

デザイン
in NIIGATA
あ
展

岡本太郎展　太陽の塔への道

2020年12月19日(土) ▶ 2021年3月7日(日)

戦後日本美術界に大きな足跡を残し、今、若い世代からも熱く支持されている岡本太郎(1911-1996)。代表作である1970年大阪万博のシンボル《太陽の塔》は単なるモニュメンタルなタワーではなく、テーマ展示「過去　根源の世界(地下)」と「進歩　未来の世界(空中)」をつなぐ動線の役割も果たしていました。2018年より再生された内部空間が一般公開され、塔の天地を貫いてのびる《生命の樹》が注目を集めています。本展では塔に至るまでの彼の作品、現在は失われた地下展示のジオラマ、その他映像や秘蔵資料によって、塔の誕生から再生までを「体感」し、岡本芸術の本質に迫ろうとするものです。ぜひご期待ください。

岡本太郎と《太陽の塔》©現代芸術研究所
※永久保存が決まり、太陽の塔を再訪した岡本太郎

《太陽の塔》1970年　©現代芸術研究所

芳年(よしとし) 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師

2021年3月20日(土・祝) ▶ 5月5日(水・祝)　(予定)

“最後の浮世絵師”月岡芳年(つきおかよしとし)(1839-1892／天保10-明治25)は、江戸に生まれ、12歳で歌川国芳(うたがわくによし)に入門、幕末から明治期にかけて大衆の人気を集めました。かつて「血みどろ絵」「無残絵」と呼ばれる初期のシリーズが脚光を浴びたこともありますが、それは彼の芸術のほんの一面に過ぎません。手がけたジャンルは武者絵、役者絵、怪奇絵、戦争画、美人画など多岐にわたります。目をみはるのは、大胆な構図、鮮やかな色彩、写生に基づく人物のアクロバティックなポーズなどで、一言でいうなら「物語とデザインの見事な融合」が芳年の最大の魅力でしょう。本展では、質・量ともに世界屈指といえる日本画家・西井正氣(にしいまさき)氏のコレクションから、選りすぐりの263点により、芳年の画業の全貌を紹介します。

《風俗三十二相　うるささう
寛政年間　処女之風俗》1888年

《藤原保昌月下弄笛図》1883年

新潟県立近代美術館(長岡市)の企画展

サンダーソンアーカイブ ウィリアム・モリスと英国の壁紙展

2020年4月4日(土) ▶ 5月31日(日)

三沢厚彦 ANIMALS IN NAGAOKA

2020年7月4日(土) ▶ 9月6日(日)

Viva Video! 久保田成子展(仮称)

2021年3月20日(土) ▶ 6月6日(日)※予定

【お問い合わせ先】〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14　TEL: 0258-28-4111　URL: https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/

研究ノート：佐々木林風について

館蔵品にある制作年不詳の二曲一隻屏風の作者佐々木林風[1884-1933]の名を意識し始めたのは、「ビアズリーと日本」展(2015-16)を準備中に、長岡ゆかりの水島爾保布（におう）について調べ出してからでした。爾保布らが美校卒業から数年後に起こした行樹社第1回展の開催予告に、林風の本名璋松（しょうまつ）の名があるものの、幾多の展覧会評に彼の名は見当たりません。単に注目されず見過ごされただけなのか、それとも不出品だったのか。そんな憶測を巡らせつつ、活動を探り始めて数年になります。

《ダリヤの花》
『女学世界』(博文館) 第12巻第11号表紙
(大正元年8月1日発行)

《春となりぬ》
『少年世界』(博文館) 第21巻第3号口絵
(大正4年3月1日発行)

林風は新発田の生れで、東京美術学校日本画科を卒業します。教職に就き小千谷中で教鞭を執っていますが、2年ほどで帰京。これが美校時代の師匠寺崎廣業（というより結城素明か）の引きなのか、作家としての野心なのか、そこは定かではありません。東京に戻った林風は、明治44年には『少女の友』(実業之日本社)に挿画の仕事を得ています。それは文展入選までの糊口をしのぐ生業だったのかもしれませんが、次第に人気が出たようで、大正初期から中期にかけての様々な少年・少女・婦人雑誌の口絵や表紙を掛け持ちで多数描いています。

では、どのくらいの分量の仕事をしていたのでしょうか。それを知るため、国会図書館蔵書等のネット検索や、雑誌目次の復刻、雑誌の新聞広告などから、林風の名前を拾い続けている途中です。とりあえず概数での報告になりますが、次のようになります。明治45／大正元年には少なくとも4雑誌で計13冊分に表紙や口絵・挿画を提供していたのが、大正2年には5誌でのべ30冊分の掲載となり、3年8誌49冊、4年9誌66冊、5年8誌29冊、6年6誌23冊、7年5誌13冊、8年2誌7冊と推移し、9年には少なくとも2誌7冊分に掲載されているようです。まだ確認できていない雑誌がありますので、結論を急ぐことはできませんが、大正3-4年頃には相当数の依頼をこなしていたことがわかります。

『少女の友』(実業之日本社)絵葉書　(制作・刊行年不詳)

加えて、雑誌附録の雙六や、読者贈呈用と思われる絵葉書も描いていますし、挿画装幀を手がけた単行書もいくつかあります。つまりは大勢の読者から愛され支持されていたに違いなく、現在の忘却ぶりがとても残念でなりません。大正10年代には同郷の後輩蕗谷虹児が華々しく活躍することになりますが、虹児以前の時代の代表的な人気挿画家の一人に林風を加えても間違いないのではないでしょうか。そうした挿絵仕事を喧伝し過ぎると、日本画家として大成したかったとの不服の呟きが墓中から漏れ聞こえそうですが。

とはいえ、先の掲載誌数は人気指標の一つにすぎず、今後他の画家たちとも比較しないと、林風の立ち位置は客観的にならないでしょう。適切な評価に相応する作品を見出し、画風を分析し、正当な評価が確立できるよう林風の調査を続けています。

桐原浩（当館業務課長）

担当雑感

展覧会を振り返って思うのは、とにかく展示作品が多かった……ということ。1000点以上の作品を出品しましたが、明日は開場式という日の朝になっても、まだ作品が並びきっていない状態。額は壁面に2段掛け、3段掛けのため、それぞれの配置決めにも時間を要しましたし、書籍は寝かせる、立たせる、傾ける、開く……と見せ方に迷います。最終的には学芸総出で作業し、なんとか間に合わせることができました。そんな中、大正乙女たちをとりこにした絵封筒のコレクションは、展覧会の準備段階から最も気になっていたもの。けれどスペースの都合上、展示できたのはごく一部。しかも作業中は時間に追われ、じっくり作品を見ることはできません。撤収時、このまま不完全燃焼で終わりたくない!という気持ちがむくむくとわき起こり、企画元と所蔵者にご相談し、引き続きこのコレクションを調査させていただくことになりました。まだまだ不明な点の多い大正期の絵封筒ですが、これを機に、作者や版元に関する情報が少しでも見えてくるのではないかと期待しています。展覧会の開催によって、館と作品、館と所蔵者との間に縁が生まれ、その次につながっていくことを実感しています。

池田珠緒（当館主任学芸員）

会場風景

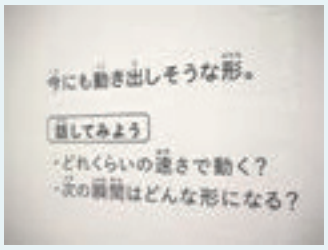
展示した絵封筒のコレクション

事業報告

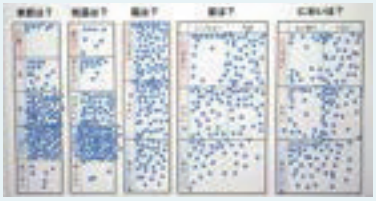
所蔵品展「コレナニ!?びじゅつ ～アートいろいろ 見かたイロイロ～」

所蔵品展を県立近代美術館(長岡市)と共同企画する初の試みでした。日本画・油彩画・版画・彫刻・工芸など約30点を選び、誰もが気軽に「現代アート」を楽しんでいただけるよう、いつもと違う展示方法にチャレンジしました。

その一つは、情報提供型の解説キャプションの代わりに、来場者に対する「問いかけ」を壁面に表示したことです。これは、自分なりの答えを探しながら鑑賞を楽しんでほしい、作品を前にいろいろお話ししてほしいと考えたからでした。どんな問いかけにするかは、両美術館の担当者が集まり、じっくりと議論しました。左の写真は、舟越直木の立体作品《Chuckwill's Widow》の傍らに付した問いかけです。



もう一つは、見る人によって異なる作品の感想を「見える化」したことです。4点の作品を対象に、来場者が感じた「季節・気温・風・音・におい」を丸シールで"投票"してもらうコーナーを設けました。右上の写真は、作家自身が「初冬の枯れて倒れたススキの原」に着想したと述べる伊藤彬の風景画《山水―くずるる2》の投票ボードです。予想以上に感想が分散しました。シールを貼りながら、人によって「見かたイロイロ」であることをよく理解していただけたと思います。



本展の工夫はまだまだあるのですが、割愛します。結果として、来場者が作品をご覧になる時間が確実に長くなりました。親子連れや若者同士、大人同士、また一人でお越しになった方など、様々な層の来場者がそれぞれのコーナーで作品鑑賞を楽しむ姿が見受けられました。

本展は、テレビ・ラジオ・新聞などで取り上げていただいた効果もあり、3,500人を超える方にご覧いただきました。会期中、近代美術館学芸員による「対話型」のギャラリートークなども開催し、好評でした。

美術館は「おしゃべり禁止」の場所と誤解されがちですが、今回の展覧会を通して、お連れの方と楽しく会話するひと時を提供できたとするなら、担当者の一人としてこんなに嬉しいことはありません。

描かれているコレは何なのか、自由に解釈しよう。作品で見つけたもの、感じたことなど、何でも話そう。――名付けて「コレナニ!?鑑賞法」。展覧会を終えて、そのさらなる普及を期待しています。

長嶋圭哉(当館主任学芸員)

2019年度 企画展イベントピックアップ

ニューヨークが生んだ伝説 写真家 ソール・ライター展

■写真家の平間至氏、新発田在住で美術家・写真館主の吉原悠博氏、展覧会企画者の佐藤正子氏をお迎えし、トークショーを行いました。

MOE 40th Anniversary 人気絵本のひみつ展

島田ゆか　酒井駒子　ヒグチユウコ　ヨシタケシンスケ　なかやみわ

■**なかやみわトーク&サイン会**
創作の裏話などをうかがうことができ、参加者も大満足でした。

■**島田ゆかサイン会**
早朝から長蛇の待機列ができました。一人一人、丁寧にサインをされている姿が印象に残りました。

なかやみわトーク&サイン会

乙女のデザイン　大正イマジュリィの世界

■**展覧会監修の山田俊幸氏による絵はがき鑑定会**
新潟ご当地ものや珍品も登場し、会場が盛り上がりました。

■**乙女のためのギャラリートーク**
アンティーク着物でおしゃれをして集まっていただきました。

タータン展　伝統と革新のデザイン

■**自分に似合うタータンを知ろう!**
パーソナルカラーの診断結果から、どんなタータンが似合うのかを教えていただきました。

■**タータン風ブローチを作ろう!**
リボンの組み合わせで作る格子柄。素敵な作品ができました。

展覧会をもっともっと楽しんでいただけるよう、2020年度も多彩なイベントをご用意して皆様をお待ちしております。

新潟県立万代島美術館
The Niigata **Bandaijima** Art Museum

〒950-0078
新潟市中央区万代島5-1(朱鷺メッセ内 万代島ビル5階)

TEL: 025-290-6655　FAX: 025-249-7577
URL: https://banbi.pref.niigata.lg.jp/